



2012年(平成24年)
9月27日
木曜日

患者ではなく人です

認知症のわたし②

ニッポン
jinmyaku@asahi.com 人・脈・記

認知症の人が、自らの体験を話す。その先駆けになったのは豪州のクリスティーン・ブライデン(68)だろう。2003年から07年にかけて4回来日し、当人が抱く不安や苦しみ、望むケアのあり方を講演で語った。

まるで記憶をしまった引き出しの鍵を一つずつなくしていくようです。

私たちの記憶に残るのは何を言ったかではなく、言い方です。感情は分かれます。

病名を背負いつつ、いかに前向きに生きるかを学ぶ長い旅が続いています。

今日の日付を思い出せないというクリスティーンの話に会場中が聴き入る。

46歳で認知症と診断され、豪政府の科学担当第1次官補を辞めた。独身で、3人娘の末子は9歳だった。鬱と絶望から立ち上がり、著書を出す。内外の同じ病の人と対話を重ね、メールをやりとりしながら思索を深めた。

結婚相談所を通じて元外交官のポール(66)と知り合い、50歳で再婚。講演も始めた。あんなにしゃべれるのは認知症じゃない、と言われる、萎縮した脳のCT画像をみせて話したこともある。

01年、ニュージーランドで国際アルツハイマー病協会の会議があった。壇上で話すク



若井晋さん(右)と克子さん



クリスティーンさん(左)とポールさん。中央が石橋典子さん。石橋さん提供

ない、という人が専門家にさえいる。とんでもない」
石橋は認知症のお年寄りに気持ちを手記してもらい、人前で発表する機会をつくっていた。言葉が出ないときは、その人の人生や生活から推し量って口に出す。
「私は補助具の役割よね。近視の人は眼鏡をかければ困らない。クリスティーンにはポールがいた。認知症でもピントのあった補助があれば、生き生きと過ごせる」

07年に札幌で開かれた講演会で、クリスティーンは会場に問いかけた。このなかに認知症の人はいますか。「はい」。手を挙げたのが若井晋(65)だった。

元脳外科医。前年まで東大教授だった。01年6月9日深夜、新しいノートを開いて書き付けた。単純な漢字がすぐに出て来ない。Dementia(認知症)か。頭部のMRI画像を自分で撮り、見たこともある。専門医に診てもらうまで4年半かかった。

妻の克子(66)とは、病を公表しないと始まらないと話合った。2年前、重い病になった人の語りを映像で残すNPOデイベックス・ジャパンに協力して録画を済ませた。言葉が思うようにならなくなった今は、講演会場でこの映像を流す。克子の説明を交え、補足する形で話を進める。

最初は何でと思ったけれど、やっと私が終わった……大切なことは、私たちが本当の自分と出会うということじゃないか。
悩み苦しんだ末に、認知症と生きることまた、新しい人生だ、と考えている。

クリスティーンは10月、5年ぶりに来日する。「私たちは患者ではなく人です。私たちが病と向き合う力を奪わないで、励まし元気づけてください」。こんなメッセージが届いた。(岡本峰子)